

「就業歯科技工士の現状と将来」

秋山佳弘

就業歯科技工士の高齢化及び若年者数の減少が危惧されだして久しいが、厚生労働省等の報告を見ると、就業歯科技工士総数は然程減少していないことが分かる。しかしながら、年齢階級別の直近データを見ると50歳以上が半数を占め、20、30歳代の減少が顕著である。このまま若年層の減少が続き、高齢就業者の退職が加わると、就業歯科技工士が大きく減少することは容易に想像できる。

一方、歯科技工士養成施設の数には20年ほど前から減少傾向にあり、平成12年に72校あった歯科技工士養成施設は、平成31年8月現在52校となっており、その殆どで定員割れが生じている。歯科技工士養成施設の定員割れは経営に大きな影響を及ぼすため、どの施設も入学者の確保に力を入れているが、定員割れ対策として入学者の基準を必要以上に下げるとは、悪循環に繋がる可能性もある。

そこで、国民に良質な歯科補綴物を提供する歯科技工士の適正数を確保することを喫緊の課題と捉え、関連データを報告する。

健康寿命の延伸に向けて ～口腔の健康と全身の健康～

堀 憲郎

この度は、徳島県歯科医学大会で講演する機会を頂き感謝申し上げます。

我が国の公的医療保険制度は、大正 11 年に健康保険法の成立から始まると言われ、先人の尽力によりこの制度は約 100 年掛けて世界に冠たる制度に成熟し、それにより今我が国は実質的に世界一の長寿国になりました。

一方急激な少子高齢化等により、この掛け替えの無い我が国の財産である国民皆保険制度の維持が困難に直面し、医療界も一致してこの危機的状況の克服に向けて、議論と対応を重ねてきました。歯科界もその議論の中で「超高齢社会における新しい歯科医療の役割と責任は何か」を模索し、「形を直す歯科医療」から「口腔機能の維持・向上を目指す歯科医療」へ、という方向性を得ると共に、危機克服のキーワードとなっている「健康寿命の延伸」に関して、歯科医療と口腔健康管理の充実により、ドラマチックな貢献ができることを、15 年以上に亘りエビデンスと共に発信してきました。

例えば、周術期の口腔機能管理の徹底により在院日数が減ることや、歯周病と糖尿病の関係、脳血管疾患発症との関係、咀嚼と認知症の関係などが注目され、国民的な理解も深まるとともに、国の政策方針である「骨太の方針」にも 3 年に亘り「口腔の健康が全身の健康と密接に関わること」が明記され、内容も「生涯を通じた歯科健診の充実」、「国民への口腔機能管理の推進」、「地域における医科歯科連携の構築」、「エビデンスの精度の向上」、「フレイル対策への歯科からの関与」、「介護、障害分野への連携」など年々充実しております。更に骨太の方針以外にも「成長戦略実行計画」「脳卒中・循環器病対策基本法」「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」「認知症施策推進大綱」等々多くの政策の中に、歯科界が目指す方向性が共有されています。

今回の講演では、これまでの15年以上に亘る取り組みと日本歯科医師会としての現状認識、そして将来の歯科医療のあるべき姿についての方向性をご披露申しあげ、その実現に向かっての議論をさせて頂ければ幸いです。